神の祝福に生きる人生　　詩篇 1：1～6

今日は礼拝後、恒例のシャローム感謝会が持たれます。教会におられる特に 75 歳以上の方々の長寿と健康を祝い、また高齢の方々にとっても、それ以外の方々にとっても皆神の家族の一員であることを覚える時です。ご高齢の方々が長年の間、信仰を保って過ごされてきたこと。その姿だけでも神の恵みを大いに覚えるものです。後に続く私たちも人生の先輩、信仰の先輩にならって、良き人生と真実な信仰を求めていきたいと思います。

１）祝福された人生

ところで、「良き人生」とはどういう人生でしょうか？　将来のために十分な蓄えがあることでしょうか？　お金の心配がなくても、健康の心配があると「良き人生」とは言えません。しかし、大きな病気もせずに毎日を過せたら、それが「良き人生」になるのでしょうか。お金があり健康でも、家族に不和や問題があれば、それは悩みの種になります。お金と健康と家族の三つのものが揃って恵まれている人なんて殆どいないと思います。健康であってもお金のことで心配したり、お金の心配がなくても家族のことで心配したりするのが普通のことだと思います。悩みは人それぞれ違っていますから私たちは自分の持っていないものを他人が持っていることで羨んだり、怒りを覚えたりするのです。そして、たとえ、お金の心配がなく、大きな病気もせず、家族に不和がなかったとしても、それだけで人の心は満たされません。どうしてでしょうか？　人は神のかたちに造られ、人のたましいには、神ご自身でなければ満たすことのできない空洞があるからです。それは「魂の痛み」」と呼んだら良いでしょうか？他の何をもってきても満たすことのできないものです。例えば自分の生きている意味は何か？と言ったことに対する答えです。ですから「良き人生」とは、神によってその空洞を満たしていただいている人生、つまり神の祝福を求め、それを受けている人生と言えます。

この詩篇一篇は「幸いなことよ。」ということばで始まっていますが、この「幸い」は「ハッピー」という意味ではありません。このことばには「祝福」という意味があります。英語の happy は happen（ハプニング）という言葉から来ています。これは、うれしいことがあったからしあわせな気分になる、楽しいことがあったから喜ぶといった場合に使う言葉です。つまり Happy というのは状況に支配される「幸せ」です。しかし、聖書が「幸いなことよ。」という場合の「幸い」には Happy ではなく blessed という言葉が使われています。「祝福されている」という意味です。主イエスは、山上の説教で「心の貧しい者は幸いです。悲しむ者は幸いです。柔和な者は幸いです。義に飢え渇く者は幸いです。あわれみ深い者は幸いです。心のきよい者は幸いです。平和をつくる者は幸いです。義のために迫害されている者は幸いです。」と八つの幸いについて話しておられます。この「幸い」でも happy ではなく blessed、「祝福されている」という言葉が使われています。貧しいこと、悲しむこと、飢え渇いていること、迫害されることは、どんなに考えても happy なことではありません。この世では柔和な人は踏みつけられ、心の優しい人はおいてきぼりにされます。心のきよい人にとってこの世は住みにくいところです。しかし、そうした人が幸いであるといわれているのは、神が与えてくださる「幸い」が環境に左右されない幸いだからです。彼らは、神の恵みによってたましいの深い求めが満たされるのです。

年齢を重ねると、当然体力も、気力も、知力も衰えます。以前できたことができなくなって寂しい思いやくやしい思いもすることでしょう。もし、私たちが人生で happy であることだけを追い求めているなら、年をとると happy でなくなるときが必ずやってきます。お金にも、健康にも、家族にもすべてに恵まれているという時期は、誰の人生でもそんなに長くは続かない、束の間のことです。こどもがちいさいうちは忙しくて大変で、こどもが早く大きくなってくれないかと思ったりするものですが、実は、こどもが小さいときが家庭的には一番良い時かもしれません。私は母が入院中、つきそっている時に「今までの人生でどんな時が一番幸せやった？」と聞きましたら母は「せやなー　お前たちと両手をつないで一緒に歩いていた頃が幸せやったな」と答えました。どこを歩いていたかは分からなかったようですが母にとっ

てはそれが幸せとして残っていたということなのです。もし、私たちが、自分たちを取り巻く状況にだけ「しあわせ」を求めるとしたら、どの年代でも、それを得ることはできないでしょう。むしろ年を取れば取るほど「しあわせ」が遠ざかっていくかもしれません。しかし、聖書は、年齢を重ねれば重ねるほど増し加わっていく「幸い」を教えています。それは神の恵みがたましいに注がれ、満たされていく幸い、神からの祝福です。

２）みことばを思う人生

　では、そのような祝福はどうしたら、私たちのものとなるのでしょうか。詩篇は「主のおしえを喜びとし、昼も夜も、そのおしえを口ずさむ人。」2 節と言っています。「主のおしえ」とは神のことばのことです。神は、神のことばによって人のたましいに恵みを注ぎ、天からの祝福を与えてくださると言っています。「口ずさむ」というのは、神のことばを読むことを意味しています。現代では本を読むときは黙読しますが、古代には、声に出して音読しました。ですから「昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」というのは、「神のことばを愛して、時間があればそれを読む。」という意味になります。また「口ずさむ」という言葉には、「思いみる」という意味もあります。いわゆる瞑想することです。口語訳では「昼も夜もそのおきてを思う。」と訳されています。ただ聖書を読み、学ぶというのでなく、それを深く思いみて自分の心の中で消化するということです。

　聖書の中の表現として「私の内にキリストがおられる」ということと「キリストの内に私がいる」というものがあります。どちらも同じことを言っていますがニュアンスは違います。丁度たとえて言うなら、私がスポンジだとすると少しこぼれた水をふき取ることは簡単に出来ます。つまりみことばを知識として自分の中に取り込むことです。しかしプールのような水が一杯溜まっているところにスポンジを入れてもそれは水を吸うというよりもスポンジが水の中にどっぷりとつかるということになります。神の祝福に満ちた世界に自分がどっぷりと浸かるというイメージですね。つまりみことばを読んでも神のことばを深く思いめぐらすという作業がなければ、神のことばは知識として頭の中だけにとどまるだけです。そして頭にだけしかとどまっていないものは、年齢を重ねて、物忘れをするようになれば、やがて消え去っていきます。しかし、神のことばを、また、そこに表わされた神のみ心をたましいの奥底でとらえているなら、心にみことばを心に宿しているなら、どんなに物忘れが進んでも、それは消え去ることはありません。先週学びましたコロサイ 3:16「キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。」ということです。最近、物忘れがひどくなったと焦るよりはみことばを心の中でじっくりと思い巡らし味わうことをおすすめします。心に宿るみことば、それが、私たちを導き、慰め、力づけ、神の恵みを、祝福をもたらすのです。

３）実を結ぶ人生

　「良き人生」とは、第一に、自分の思い通りになるかならないかではなく神の祝福が留まる人生です。第二に、「良き人生」とは、神のみことばによって養われていく人生です。みことばが神の祝福と恵みを運び、私たちの人生を満たしてくれるのです。そして、最後「良き人生」とは、第三に、実を結ぶ人生です。詩篇に「その人は流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結びその葉は枯れずそのなすことはすべて栄える。」3 節とあります。ここで、木は、幸いな人生を表わしています。「水の流れ」とはみことばです。幸いな人生はみことばを吸収して成長していくのです。「良き人生」はつねにみことばに養われていますので、詩篇 92:14 にあるように「彼らは年老いてもなお、実を実らせ、青々と生い茂ります。」。

　そして、「良き人生」は、たんに葉をおい茂らせるだけでなく、「実」を結びます。聖書の中で実とは救われる人が起こされることを実と呼び、御霊の実という内面的なものもあります。また義の実と言って神に服従しているがゆえに出てくる行動や行為ということもあります。ただし、どの実であっても自分の努力で生み出されるものではありません。そして主イエスは「あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子

となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。」（ヨハネ 15:8）とも言われました。実を結ばない人生は「良き人生」ではありませんし、実を結ぶことを神は信仰者に願っておられるのです。

しかし、実を結ぶということは、一朝一夕でできることではありません。「桃栗三年、柿八年、柚子の大馬鹿十三年」などということばがあるように、どんな果物でも、種をまいたらすぐに木になり、木になったらすぐに実がなると言うのではありません。信仰を持ったばかりの方はまだ苗のような状態です。イエス・キリストという土壌の中にしっかりと根付く必要があります。キリストのことばによって養われ、成長してはじめて実を結ぶことができるのです。詩篇に「時が来ると実を結び」3 節とあるように、すべてに「時」があります。多くの木は、寒い冬に葉を落として死んだようになりますが、春には芽吹き、夏に葉を茂らせ、秋になって実を結びます。詩篇で歌われている実を結ぶ木は、年中花を咲かせ、年中実を実らせている木ではなく、冬の寒さ、夏の暑さに耐えて、秋に実を結ぶ木です。人生には「時」があります。私たちの人生はいつも「春」の時ばかりではありません。試練の冬、困難の夏を過ご差泣ければならないでしょう。しかし、それが私たちの人生に豊かな実を結ばせるのです。まだ若い人も、年配の方も、人生の実りの時がかならず来ることを信じましょう。たとえ、地上でその実が見られなくても、真実な信仰者は天でその実を必ず実らせることができます。

「時がくれば」の「時」とは人生の総決算の日をも意味します。詩 1:4 に「悪しき者はそうではない。まさしく風が吹き飛ばす籾殻だ。」とあります。神が私たちの人生のすべてをさばかれる時、 実りのない人生はもみがらのように集められ、火で焼かれます。しかし、結んだ実は神に受け入れられ、報われます。どんなに真実に生きても、この世ではそれが認められなかったり、この時代に受け入れられないことがよくあります。しかし、だからと言って結んだ実が無駄になることはありません。神は隠れた実をも、それこそ自分が忘れてしまった実をも見て、知り、それを受け取ってくださるのです。

ですから「もうこんな年になって・・」とか、「今から私に出来ることは何もない！」などと思わないでください。人生は単にその長さだけで量られるのではありません。どんな動機で、何を目的に生きてきたかによって量られます。そのことを思い、どんな時でも、神のために実を結ぶ「良き人生」を生きようではありませんか。息をひきとる最後の時まで、そのことに励もうではありませんか。